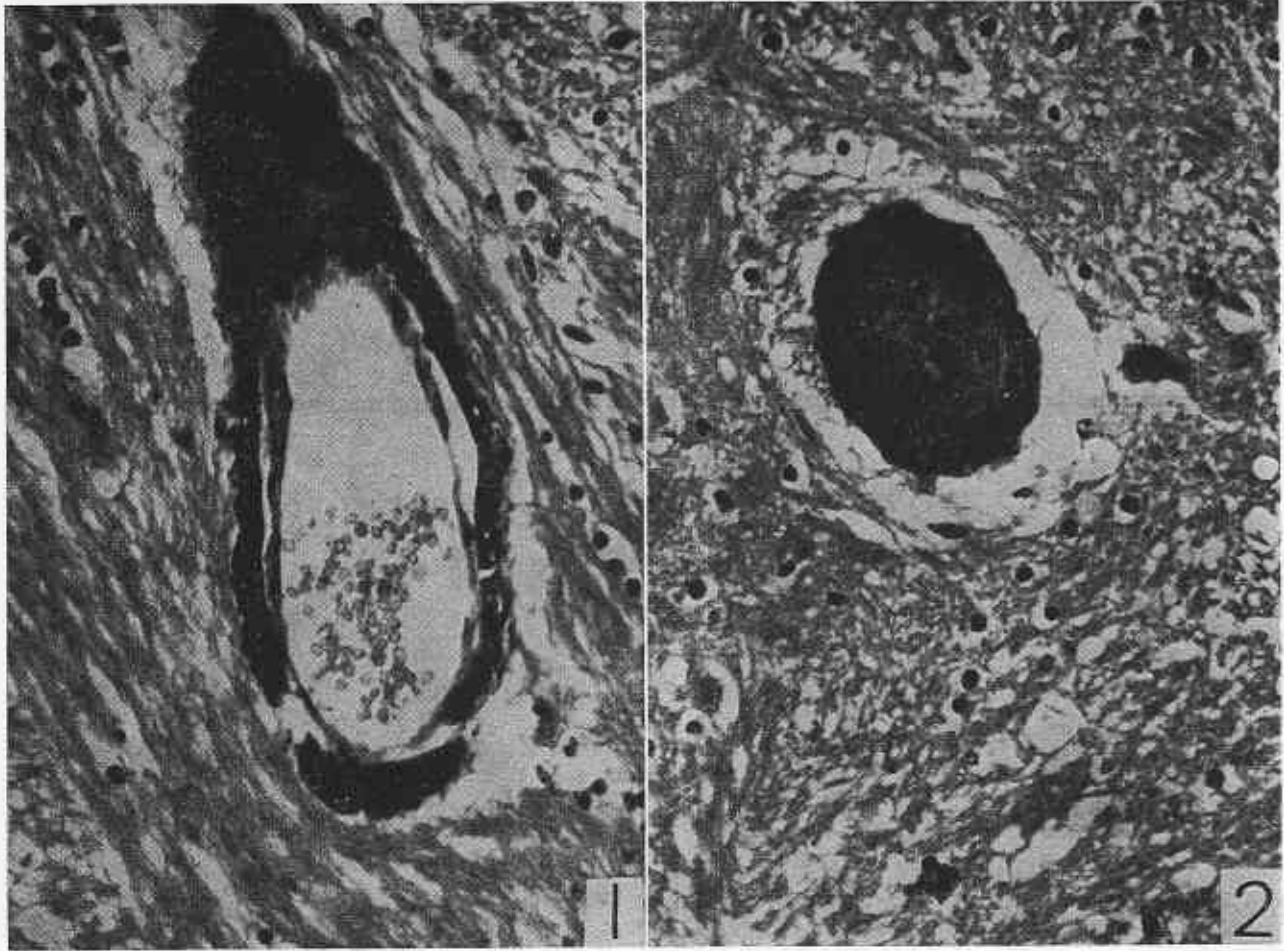


終脳内囊における血管壁偽石灰沈着

岩手大学農学部家畜病理学教室出題・第6回獣医病理学研修会標本 No. 79



脳における退行性変化（例えば脳軟化など）の発現機序に関しては、しばしば酸素欠乏が指摘され、この具体的要素として、灌流血管壁における形態学的変化が、有力な証拠として取り上げられることが多い。

しかしながら、ここに提示する標本では、かなり陳旧なしかも顕著な変化が血管系に認められながらも、脳実質には病変らしい病変が認められない。したがって脳病変と血管系の形態的变化に因果関係を求める場合、かなり慎重な検討を必要とすることになるのであろう。もちろん、脳以外の病巣の発現に際しても、全く同様なことが考えられるわけである。

本例はホルスタイン、12才の雌牛で、左側臀部における外傷が治ゆせず、月余にして次第に深部に波及拡大したため、予後不良と認め放血殺を行なったものである。

剖検診断： 1. 放血殺左側臀部諸筋における壊疽ならびに空洞形成 3. 左側化膿性線維索性収縮節炎 4. 全身性水腫 5. 限局性無気肺 6. 瘦削

組織学的所見：臀部諸筋には壊死、膿瘍形成がみられ器質化を示すところもある。リンパ節の洞カタル、無気肺、肺気腫、軽度の間質性腎炎などがみられた。中枢神経系の系統的観察により、全般に水腫性変化ならびに実質の萎縮と思われるいわゆる“篩状態”が血管周囲リンパ隙周辺にみられ、かつこれらの部分に黄色色素の沈着が認められている。

終脳線状体を含む前頭断切片の内囊 (capsula interne) に主として、血管壁の偽石灰沈着がみられ (図 1)、著るしいものでは管腔を完全に閉塞しているものもある (図 2)、かかる変化は他の部分には認められず、また、脳全体にわたって前記以外の特別な病巣を発見することはできなかった。

猶血管にみられた偽石灰は Kossa 氏法で陰性に近く、Berlin-blau 反応で鉄陽性に染め出されるもので、脳血管にしばしば認められる。